

今年、没後百周年を迎えたロシアの作家、アントン・パロプロビッチ・チェーホフ（一八六〇—一九〇四年）に旅行記『サハリン島』（一八九五年刊）がある。サハリン（樺太）は一八七五年の「樺太千島交換条約」で帝政ロシアの統治下に入り、一大流刑地となっていた。

作家は一八九〇年夏の約三カ月間、ここに滞在し、囚人たちの克明な実態調査を行った。その時のノンフィクション作品がこの旅行記で、中次のような記述がある。

「サハリンの処女探検の権

利は、疑いもなく、日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのだ」

南樺太は日露戦争のポーツマス講和条約（一九〇五年九月）で日本に戻るが、第二次大戦の終戦直後、スターリンが「南サハリンとクリル（千島）列島はソ連に移り…」と、「ソ連国民へのメッセージ」を送り、当然のようにソ連領土となってしまった経緯がある。しかしチェーホフは一世紀以上も前、「樺太は元来、日本の領有に属するべきものだ」と認めているのである。

「第二次大戦の結果、樺太がソ連に『返還』されたことになっているが、これは理にかなったことなのか」。近著『日露領土紛争の根源』（草思社）で重大疑義を提起した元商社マンのロシア研究家、長瀬隆氏の説明はこうだ。

「樺太が半島ではなく島で



偏狭な愛国主義を脱して

チェーホフ「サハリン島」

あることを最初に発見したのは、一八〇九年に幕府の命で北樺太を探検した間宮林蔵だった(樺太とユーラシア大陸を隔てる海峡は間宮海峡と呼ばれる)。しかし、この事実を紹介したドイツ人医師、シ

日露開戦から100年

第5部 怨讐を超えて

「ホルトの大著『日本』(原書はドイツ語)のロシア語版(一八五三年刊)は間宮の新発見部分を故意に削除、つまり改竄してしまい、ソ連時代から現在に至るまでこの問題はタブーとなっている。

医師でもあったチェーホフは『サハリン島』執筆に当た

り、明らかに『日本』のドイツ語原書を読んでいた

今夏、札幌で国際シンポジウム「21世紀のシベリア・極東」

「アジア共同体」のパートナー(北大スラブ研究センター主催)が開かれ、特に「チェーホフ・サハリン・日

100年

本」と題するセッションも設けられた。ロシアから「チェーホフ『サハリン島』博物館」のツペンコワ館長とピソコフ・サハリン大学教授が講演したが、論議を呼んだのはチェーホフの『サハリンの日本領土論』で、長瀬氏も自説

を主張した。しかし、ロシア側の歴史認識は頼りなく、議論はあいまいなまま終わってしまった。

日露戦争の時代、日本の作家では二葉亭四迷(一八六四—一九〇九年、本名長谷川辰之助)が領土問題にからめてロシアの出入に率直な懸念を吐露している。死の前年には随想『予が半生の懺悔』にこう、したためた。

「何でも露国との間に、かの樺太千島交換事件という奴が起って、だいな世間がやかましくなつてから後、私がずっと子供の時分からもって

いた思想の傾向一維新の志士肌ともいふべき傾向が頭を擡げ出してきて、即ち、慷慨愛国というような世論と、私のそんな思想がぶつかり合っ

て、其の結果、将来日本の深憂大患となるのはロシアに極まっている。明治三十六年の七月、日露戦争が始まるとい

うので私は…今の朝日新聞に入社した。…大分また文壇に近付いては来たが…矢張り例の大活動、大奮闘の野心はある…今でもある」

チェーホフも日露戦争にロシア人としての憂国の情を抱いていた。作家のオリガ夫人の弟、ウラジミールが貴重な証言を残している。

「…われわれの勝利は(ロシア皇帝の日本紙注)専制を強化し、われわれに息切れさせている圧制を強化することになるではないか。その勝利は迫りくる革命を阻止するものになるだろう…」(『日露領土紛争の根源』から)

長瀬氏は「チェーホフの神は国際主義に滴たされて、偏狭な愛国主義とは無縁だった」と指摘する。

二人の「憂国の文豪」に直接の接点はなかったが、チェーホフはドイツ滞在中に四十四歳で病死し、二葉亭はペテルブルクでの特派員生活から帰国途中、ベンガル湾上で四十五歳で客死した。

没後百年を記念して今秋、東京では日本近代文学館主催の「チェーホフ展」や劇団昂の公演「チェーホフ的気分」(三百人劇場)など催しがめじろ押しだ。好機をとらえ、日露双方は百年の怨讐を超えて、作家が提起した「領土」の淵源を見つめ直すときではないか。

(斎藤勉)